52　1927年における津市立病院の女性医師採用

佐藤ゆかり
三重の女性史研究会

現政権（安倍内閣2014.11現在）は「女性の活躍推進」に大きく旗を振っている．それは現政権に始まったことではなく，例えば2008年男女共同参画推進本部決定「女性の参画加速プログラム」でも，重点的取組を行うべき3分野の1つとして「女性医師」が挙げられている．しかし2012年の女性医師割合は19.6%（『男女共同参画白書』内閣府2014）で，目標の2020年30%に遠く及ばない．

ところで東京女医学校（当時東京女子医学専門学校／現東京女子医科大学）の同窓会「至誠会」の機関誌『女醫界』175号（1927.10）に吉岡正明「東海各地病院参観記」の記事がある．それによると1927年8月19日吉岡が津市立病院を訪問し，6名の卒業生と面会したことが記されている．吉岡が「（女医が）地方の病院で六名も採用されてゐる處は他に無い」と書いているように，当時はもとより現代と比較しても，津市立病院は女性医師の採用率が非常に高かったのではないかと考えた．

津市立病院は1876年三重県公立病院を前身とし，三重県私立病院（通称「今井病院」）を経て県から津市に譲渡され1910年津市立病院となった．1944年三重県立医学専門学校新設に伴い，その付属病院として三重県に移管され，現在は三重大学医学部附属病院となっている．津市立病院に関する史料は戦災でほとんど焼失していることから，先述の『女醫界』の他，『三重大学医学部50年史』（記念誌発刊専門委員会1995／以下『50年史』と略す），『津市史第5巻』（西田重嗣1969／以下『津市史』と略す），伊勢新聞，大阪朝日新聞三重版，日本女医会機関誌『日本女醫會雑誌』を調査した．

その結果，吉岡が訪問する4か月前の4月「内科，外科，産婦人科に欠員中だった医員を十八日三名とも女医で補充した，これで各科部長を除く九名の医員中六名まで女医となった」（大阪朝日三重版1927.4.20）「辞令　内科部女医清水げん　外科部同小池しげ　婦人科部同木村静　津市立病院附頭書の医員を嘱託す月手当七十円」（伊勢新聞1927.4.19）とあった．また10月には「津市立病院に二十日また一人女医が殖えた，小児科に京大病院から楠谷文子氏が来たので，これで内・外・婦人・小児・眼・耳鼻の六科ともにわたり女医が揃い，婦人科には二人いるから女医は総勢七人，男医は六科長の外には内科に一人ずつ医員がいるだけだから男八人に女七人という陣容である」（大阪朝日三重版1927.10.26）とあり，女性割合は46.7%となる．1937年23.5%，県立医専移管直前で戦況厳しい1944年37.5%（いずれも『50年史』掲載名簿より算出）と比べてもはるかに高率であることがわかる．

では当時，何故女医を大量採用したのか．『50年史』によれば「大正から昭和の初年にかけて病院の経営状態は安定していた」（P68）とあるが，1920年から病院会計は市の一般会計から離れて特別会計となり（『50年史』P64／『津市史』では1917年），建物の老朽化と改築問題を抱えていた．女医の月給70円に対応する男医の月給のデータは見つからなかったが，同時期津市賃金の男女差「紡績男工1円77銭，女1円2銭．日傭男1円65銭，女80銭．」（大阪朝日三重版1928.3.28）を参考にすると，女医の大量雇用で人件費の削減を図れたことがうかがえる．また7年後の『日本女醫會雑誌』64号（1934.12）の会員名簿で確認すると，7名のうち5名県外，1名県内郡部で，津市立病院に残った者は1名もいなかった（1名は不明）．様々な見解があろうが，経営側が女医について長期の雇用を視野に入れていなかったとの見方もできる．その中で全員が津市医師会にも所属し（伊勢新聞1928.1.1「謹賀新年」津市医師会員1927.11現在），第32回三重県医学会総会の発表者21名の中に「ギプスベットト其適應症ニ就テ小池シゲ」とあり（伊勢新聞1927.11.17），活躍もしていたことがわかった．